

KAN
環

胡蝶
第34号

千曲川地域の人と文化を紡ぐ



胡蝶

「見残した胡蝶の夢や遅桜」

正岡子規



信州の鎌倉とよばれる上田市塩田平には、独鈷山山麓の一角に真言宗の前山寺があります。巨木に覆われた石畳の参道から茅葺きの門をくぐり木々の間を進み境内へ。鐘楼前に立ち三重塔に向かう光景は、フジの花、玉造のツツジ、モミジの木々など新緑に覆われた心静まる空間です。

表紙写真・文 矢幡正夫

も く じ

- 4 おもちゃドクターとして活動する
小松隆秀さん ----- 伊藤文字
- 8 上田情報ライブラリーでは今・・・ ----- 望月聡子
「江戸時代のお金とくらし近世金銭事情」
第4回 大判・小判 ～慶長から万延へ～
講師 尾崎 行也さん
- 10 信濃を旅した文人たち ----- 海野 郁
有島武郎（その一）『一房の葡萄』に想う
- 16 温故知新の宝庫「**信州地域史料アーカイブ**」その1
- 18 寄稿 ----- もぎりのやぎちゃん（やぎかなこ）
あさくさ雷門ホールが繋ぐ映画と人々
- 20 あとがき



塩田産川の桜並木

おもちゃドクターとして活動する



小松隆秀さん



小松さんと清水さん

好奇心たっぷりの男の子がそのまま大人になったような上田市丸子在住の小松隆秀さん（62歳）は、自称「おもちゃドクター」として活動している。おもちゃを修理するだけでなく、オリジナルのおもちゃを手作りする。

毎月第二土曜日の午後、上田創造館で「おもしろ・ふしぎ体験広場」と「おもちゃ病院」を開設し、不思議な体験ができる場を提供している。平成21年に清水初江さん、山崎智幸さんと共にスタートし、今年で10年になる。普段は、どうやったら子どもたちに興味を持ってもらえるかアイデアを練り、壊れたおもちゃの修理に知恵を絞る。ふしぎ体験ってどんなことができるのだろうか？ おもちゃ病院って？ 小雪舞う2月の開設日、創造館にお邪魔した。小松さんら

机を出し、手作りおもちゃを並べると、子供たちがすぐに集まってきた。

Q どうしておもしろ・ふしぎ体験広場を始めようと思われたのですか。

A 当時の創造館長が、来館した子どもたちがテレビゲームに夢中になっている姿を見て、「何かおもしろいことをやらせたい」と思ったのがきっかけです。創造館は星空観察会や科学少年団活動などに力を入れていきますので、余計そう思っただけでしょうね。

館林市にある向井千秋記念子ども科学館を見学に行ったとき、70人ほどのボランティアが生き生きと活動している姿を見て、上田でもそのようなシステムを作りたいとスタートしました。将棋教室や

鉄道模型展示なども始めたのですが、現在はこの体験広場だけです。

Q 「おもちゃドクター」とは聞き慣れない名称ですが。

A 平成18年頃、西本保さんという方が中心になって創生された「おもちゃ救済隊うえだ」というのがありました。西本さんは、壊れたおもちゃを直す姿を子どもたちに見せることによって、物を大切にすることを促すことと願っていました。

救済隊では「おもちゃドクター」の養成もしていて、そこに入会しました。小さい頃から、おもちゃや機械をいじったり分解したりするのが好きでした。

Q 今、それらの体験が生きているわけですね。

面白そうなおもちゃが並んでいますが、どのようにして作られるのですか。

A 手作りおもちゃのネタは「サイエンスラボ」と検索すると、たくさん出てきます。ただ説明通りに作ってもなかなかうまくいかない。例えばこの「のぼり虫」。1mほどの塩ビ管に水を入れ、磁石の付いた浮きを浮かべて上下にふたをします。同じく磁石を装着した

おもちゃのてんとう虫が、塩ビ管の外側を浮きの磁石に沿って上っていく様子ですが、上り方が遅すぎたり遅





すぎたり、てんとう虫が床に落ちたり……。浮きの大きさ、てんとう虫の大きさ、磁石の強弱などいろいろ試しました。ようやくできたのが、この赤と黄のてんとう虫です。高度な技術を使うわけではないのですが、遊べるまでの過程が大変です。でも、これが面白いんですけどね。

Q ペットボトルを二つつなげたてんとう虫のおもちゃや、円盤状の厚紙を重ねたおもちゃなど、身近な材料で作られていて親しみを感じます。

A ペットボトルのおもちゃの一部は私のオリジナルです。水を入れたペットボトルに、やはり水を入れた小さなパンダの模型が入っています。空気圧と水圧でパンダが浮いたり沈んだりする仕掛けです。これもペットボトルのつなぎ方、パンダ体内の重りのステンレスコイルなど様々な工夫を凝らしました。

Q 子どもたちが楽しそうですね。興味深そうに触っています。
A 「どんどん触ってみて」と声掛けしています。子どもたちがいろいろやってみて「ねえ、どうしてこうなるの?」と聞くのでしくみを説明します。理解できると「へえー、すげえー」などと感心してくれます。こちらも思わず「やったー」の思いです。子どもたちの生き生きとした表情にやりがいを感じます。

子どもたちの柔軟な発想に驚かされることもしばしばです。中学校でおもちゃの講座を開いたとき、ある部分で「ステンレスの代わりに石でもいいんじゃないの?」と言われて、やってみたらうまくいきました。とても感心しました。

Q おもちゃ病院についてお聞かせください。どのような修理が多いですか。



A ぬいぐるみの脚が折れたとか、動かなくなつた、鳴らなくなつたなどいろいろですね。年間40件ほど持ち込まれます。ぬいぐるみの骨折は体を切り開いて、プラスチックの脚をボンドなどで接着し体を縫い合わせます。中には、電池ボックスの破損や接触不良など、



手作りおもちゃ

0・5ミリのズレが原因ということもあり、一筋縄ではいきません。

西本さんの指導で、子どもたちには「このおもちゃは入院しましたようね」と言います。直つたら「退院です」と伝えるように心がけています。

Q どのようなときが嬉しいですか。

A 子どもの視点つて大人と違うんだなあと感じたときなどです。何にでも興味を持って、その度合いも大人と違う。子どもって素晴らしいとつくづく思います。



インタビュウをしている間、子どもたちが入れ替わり立ち替わり集まってきた。一つのおもちゃに熱中

する子、全部のおもちゃを試してみる子とさまざまだが、一様に彼らの瞳は輝いている。そんな姿を見守る小松さんと清水さんのまなざしは温かい。手を出し過ぎず口をはさみ過ぎず、要所要所で説明する。付き添ってきたお父さんお母さんには、身近な材料を使ってサイエンスおもちゃを作ったり、大事なおもちゃを修理したりすることを望んでいる。

体験広場に参加した子どもたちは、面白かったことをおじいちゃんおばあちゃん、友だちらに話すことだろう。本人の記憶にも残るに違いない。少しずつ少しずつ科学の花が拡がっていく。

平成31年2月9日訪問

伊藤文子



上田情報ライブラリーでは今・・・

「江戸時代のお金とくらし 近世金銭事情」

第4回 大判・小判 ～慶長から万延へ～

講師 尾崎 行也さん
(上田社会教育大学講師)

まだお金という概念がない物々交換で暮らしていた時代は、今思えば気が遠くなるほど手間や時間がかかっていたことでしょう。それに比べて、現代のお財布事情は、スマホをかざして「ピッ」とバーコードを読み取るだけで支払い完了！

LINE Pay や PayPay の便利なスマホアプリを使って、最近はお金を持ち歩かなくても買い物ができるシステムが増えてきました。商品の売買にはその時代なりの方法があり、今回は江戸時代に流通していたお金を通して、当時の庶民の暮らしを見ていきました。

5回シリーズの「江戸時代のお金とくらしー近世金銭事情ー」は、古銭から藩札まで地域に残された資料を基に学習する講座です。見識を深めるため、第一回目に江戸時代を中心に使用された実物のお金の見学会を行いました。見学先は、公益財団法人 八十二文化財団 スペース 82 と長野県立歴史館（歴史博物館・文書館 1994 開館）です。

(上田情報ライブラリーホームページより)

<http://www.city.ueda.nagano.jp/jlib/tanoshimu/toshokan/library/topic/documents/kaheikengaku.pdf>

今回は、江戸時代に使われていた多くの大判、小判がスクリーンに映し出されました。壱両、壱分、十両など、日本銀行の貨幣資料館から取り寄せられた映像で、武田信玄時代に使われていた「甲州金」という金貨もありました。驚いたのは、大判は慶弔用、お祝いに使う専用の貨幣なのだということ。金貨の始まりは砂金でしたが、それを粒

にして、目方を決めて使われるようになりました。金は主に関東で、銀は主に関西で使われましたが、金は四進法、銀は十進法で大変わかりづらいものでした。

次に、白田町に住んでいた権助さんが天明2年9月に江戸への出張経費の報告をした勘定帳を解読しました。御廻米御訴訟ごかいまいごそしょうといって、当時年貢米を江戸へ納めなければならなかったのですが、廻米は運搬が大変なので別の形で納められるよう訴えに行った時のものです。

江戸への往復22日間で8貫800文(8800文)が必要でした。一日400文使ったと記載され、ふたり一組が原則のため、同行者七郎左衛門の名前もあり、同額が必要でした。また交渉するにはお土産が欠かせず、それを含めて総額22貫560文かかりました。

(金1両=永1貫文=永1000文、永1文=1匁、1匁=3.75グラム)

永22貫=約88キログラム(82.5kg)

確かに、経費として運んでいくのは困難に感じます。

金1分=永250文(4進法)

当時の相場 金1両=5貫600文だったため

22貫560文=22560文

$22560 \div 5600 = 4.02857\dots$

4.029両=4両永楽銭29文に両替しましたとの報告が残っています。

理解困難な内容になってきたところで、尾崎先生が「こういう不便なものをあなたたちのご先祖は平気な顔をして使っていた」と言うと、会場は一気に笑いに包まれました。

その後は、我々の祖先はどういう場合に金を使っていたか勘定書を解読し、金貨から見えるその時代の背景を知るためのわかりやすい解説がありました。



平成31年2月取材
望月 聡子

信濃を旅した 文人たち

ありしまたけお
有島武郎 (その一)
『一房の葡萄』に想う



旧有島武郎別荘「浄月庵」右側がカフェスペース



有島武郎は、生まれながらの才能と恵まれた環境の中にいた。

明治11（1878）年、有島家の長男として東京市小石川に生まれる。大蔵省勤務だった父武は、有島4歳の時に横浜税関長に就任。異国情緒漂うこの地で、米人牧師の家で英会話を学び、小学校は横浜英和学校に入学した。教師は西洋人ばかり、9歳で学習院に編入学したときは、今でいうバイリンガルだったという。礼儀正しく成績優秀、美少年だった有島は、皇太子（のちの大正天皇）の学友に選ばれている。

学習院中等科に進むと、もともと好きだった文学や歴史、絵画などへのめり込み、農業に関心を持つようになる。中等科を卒業後、「北海道という未開の地の新鮮な自由な感じ」にあこがれて札幌農学校に進学、教授をしていた親戚の新渡戸稲造宅に寄寓した。この頃、父武は狩太村（かりふと、現ニセコ町）に

広大な土地を入手、開拓事業に着手する。

農学校卒業後、有島は25歳で米國留学に旅立つ。ペンシルヴァニア州のハヴァフォード大学大学院に入學、わずか一年で論文『日本文明の發展―神話時代から徳川幕府の滅亡まで』を英文で完成、文學修士を取得した。2年目の夏を精神病院の看護夫として過ごした有島は、9月、ハーバード大学大学院専攻科に籍を置く。その後はニューハンプシャー州の農場で数ヶ月間働き、ワシントンに移ってからは国会付属図書館に通って文學書や哲學書を読み耽った。

こうして3年間の留學生活を終えた有島は、イタリヤ留學中の弟生馬とナポリで落ち合った。スイス、パリ、ロンドンなどヨーロッパ各地を精力的に巡って見聞を広め、

多くの*スケッチを残している。

* 武郎の死後、生馬が刊行した『有島武郎滞歐畫帖』は、淨月庵記念室に展示されている。

この時代にこれほどの体験ができたのは、有島家がかんりのの上流家庭だったからだろう。後年、武郎は作家に、生馬は画家になり、もう一人の弟里見淳も作家として活躍した。

29歳で帰國した有島は、東北帝國大学農科大学（札幌農學校が昇格）の大学予科教授として札幌に赴任した。若くして入信したキリスト教を、この頃棄教している。

31歳の時、陸軍大将神尾光臣の次女安子と結婚、11歳年下の可憐な女性だった。ふたりの間には、のちに俳優森雅之となる長男行光、次いで次男敏行、三男行三が生まれた。しかし、幸せな生活は長く

は続かなかつた。安子が結核を發症、一家は札幌生活を切り上げて上京する。四つと三つと二つになる子供を残して、安子は平塚の杏雲堂病院に入院した。

いよいよH病院に入院する日が来た。お前たちの母上は全快しない限りは死ぬともお前たちに会わない覚悟の臍はらを堅めていた。二度とは着な
いと思われ―そして實際着なかつた―晴れ着を着て座を立つた母上は内外の母親の目の前でさめざめと泣きぐずれた。気性のすぐれて強いお前たちの母上は、私と二人だけいる場合でも泣き顔などは見せた事がないといつてもいいくらいだったのに、その時の涙はふくあとからあとから流

れ落ちた。(中略)

母上は血の涙を泣きながら、
死んでもお前たちに会わない
決心を翻さなかった。(『小さ
き者へ』)

大正5(1916)年8月2日、
安子永眠。27歳の若さだった。有
島その日の日記には、「わがこよ
なくいとしき最愛の妻逝く。彼女
は厳肅な静けさと見事な諦めとを
もって、最後の息を引き取った」と
記された。

「清い子供たちの心にお葬式の悲
しみを残すのは可哀相だから、私
の死を知らせないようにしてくだ
さい」という安子の遺言により、
青山斎場での葬儀の日、子供たち
は信州の山の上で過ごしていた。

8月10日

この日父とNとに伴はれて軽
井沢に発つことになった。父
も九日以來少し健康を害ねて
ゐるやうに見えた。齢をとっ
てから逆縁に遇はねばならな
かったので、その心は私以上
に痛んでゐる。午後の二時頃
に軽井沢に着いた。三人の子
供達は待ちくたびれてゐたや
うに狂喜して私を迎へた。彼
等は何事が起つたかも知らず
にゐたのだ。(『信濃日記』)

葬儀後、有島は軽井沢の別荘・
浄月庵に滞在した。浄月庵は軽井
沢駅から2キロ余り、山の中腹に
建つ和洋折衷風の二階家で、近く
には妹愛子が嫁いだ三笠ホテルが
あった。当時、あたりには視界を
遮るものが何もなく、ホテルの窓

からは軽井沢駅に入ってくる汽車
が見えたという。

心を癒すために訪れた軽井沢
だったが、連日雨が降り続いてま
すます気が滅入ってしまう。12日、
父を誘つて上山田温泉に一泊、翌
日、別所温泉に向かった。上田駅
では馬車が出るまでに30分程あつ
たので、有島は大急ぎで上田蚕糸
学校の先生をしている*H宅を訪
れた。Hは驚いて玄関に現れたが、
奥では細君が痛々しくやつれて臥
せていて、今度は有島が驚いてし
まう。突然の訪問をふたりは懐か
しがつたが、時間がないのですぐに
取つて返し、馬車に乗った。

*Hとは札幌農学校の同期生だった
早川直瀬のことで、『製絲經濟學』『生
糸と其貿易』などの著書がある。



多くの文人が泊まった別所温泉
柏屋別荘(現在は廃業)

8月13日

円太郎馬車に久しぶりで乗って、白くぼくぼくとほこりの立つ堅い県道を走らせながら、私は始めて養蚕地なる信州の田舎を眺めやった。私に殊に目立って見えたのは宏大な養蚕所の白い壁だった。

(中略)別所はいゝ温泉場だった。

た。遠くから望まれてみた男神女神の二山の間から流れ下る逢初川といふ小溪を中に挟んで立ち連なった旅籠は、こゝの起源の古さをおのづから物語ってゐる。(中略)

湯ぎらひな私にもなつかしまれる湯の匂ひが私の心をなごやかにしてくれた。私はその夜夢も見ずに眠った。(『信濃日記』)

翌早朝、柏屋別荘に泊まった有島は逢初川に沿って歩き、常楽寺と安楽寺を訪れた。三重塔の壮麗な美しさの前に佇んでいると、勤行の鐘がさわやかな夏の空気を動かして鳴り出した。

こうして、別所温泉でしばし安らいだ有島は、軽井沢に戻って安子の遺稿整理に没頭する。叢に咲

く薄紫のまつむし草を表紙のデザインに、遺稿集「まつむし」が編まれた。安子の写真、「病床雑記」や短歌、遺書全文の他、親族知人による弔歌などが収められた。

同じ年の12月4日、父武が胃癌で逝去。「白樺」同人に加わっていた有島は、この年を転機として本格的な作家生活に入る。『カインの末裔』は、狩太村の農場を舞台に渡り者の農夫の姿を描いて注目を集め、『小さき者へ』は子供たちに向けて一夜にして書き上げられた。長編小説『或る女』は、今なお高く評価されている。

札幌で出会った木田金次郎がモデルになった『生まれいずる悩み』は、大阪毎日新聞と東京日日新聞に連載された。木田は北海道の岩内で漁師をしながら、画家になる夢を捨てきれないでいた。画家への

道は困難を極めたが、有島は彼の人と才能を愛し、個展を開くなどして支えた。

有島の死をきっかけに木田は画業に専念する決意を固め、やがて北海道を代表する洋画家となった。有島に初めて出会った時の印象は、その人となりを見事に表している。

有島氏は、どこまでも貴族的な、ノーブルな様子をしている。知的な、高くひいでたひたいが、いなか者のひげ目に強い印象でせまってきた。住む世界のちがいが、そんな感じである。しかし、すでに互いの絵を通じて示し合った自然と人間への愛情、それが二人の心を結びつけ始めていた。(木田金次郎著『生れ出づる悩み』と私)



雪の日の軽井沢高原文庫
(3月5日大藤副館長撮影)

木田はまた、「貴族的で高い教養をもつ氏の、その奥にあるヒューマンで善良な面に魅かれた」とも書いている。実は、有島は父から受け継いだ450町歩もの広大な狩太村の農場主でもあった。しかし、日頃から小作人たちの惨めな生活に心を痛め、地主として搾取する側にいることに悩んでいた。

44歳の時、60人の小作人を前

に、懸案だった農地解放を宣言する。農場は小作人に無償譲渡された。

終焉は思いがけないかたちで訪れた。大正12(1923)年6月9日、『婦人公論』の記者波多野秋子と軽井沢の浄月庵で心中。有島45歳だった。遺された子供たちは、弟の生馬が親代わりとなって育てた。

3月初旬、浄月庵を訪れた。浄月庵は、軽井沢町塩沢湖にある軽井沢高原文庫の道を挟んだ向いに移築されている。杉皮貼りの建物は古き軽井沢別荘の面影を伝え、2階には有島武郎記念室が、1階にはカフェ「二房の葡萄」がある。カフェの名は、自らが挿画装幀した童話集『二房の葡萄』にちなんで名づけられた。

横浜英和学校での体験を基にした『一房の葡萄』には、「僕はかはい、顔をしてゐたかも知れないが、體も心も弱い子でした。その上臆病者で言ひたいことも言はずにすますやうな質でした」とある。

現在、軽井沢高原文庫に有島の写真が展示されている。その横顔は生来の気弱さに優しさを添えて、どこまでも知的でノーブルだ。

海野 郁



浄月庵 記念室内部



浄月庵 山荘風の洋間



この日、カフェはオープン前でした

参考文献・Web サイト

『新潮日本文学アルバム 有島武郎』

新潮社 1984

『有島武郎全集』第八巻 筑摩書房

1980

『小さき者へ・生まれいずる悩み』有

島武郎著 岩波文庫 1993

『生まれ出づる悩み』と私』木田金

次郎著 北海道新聞社 1994

『二房の葡萄』有島武郎著(名著復刻)

日本児童文学館 1972

『上田と文学』上田市立博物館 1987

『死を想う 作家が綴る心の手紙』宇

治土公三津子編著 二玄社 2003

『軽井沢高原文庫 有島武郎と軽井

沢展』軽井沢高原文庫 2008

軽井沢高原文庫

<http://kogenbunko.jp/about/>

浄月庵や堀辰雄山荘などを公開

温故知新の宝庫

「信州地域史料アーカイブ」 その1

ねえ、「戌の満水」って知ってる？

知らないなあ、なに、それ？

じゃあ問題、次のどっちだと思う？

- 1 番 戌という名前のため池に水が満杯になったのか、
- 2 番 壬戌の年に千曲川の大洪水でたくさんの被害がでた、さあどっちだ？

千曲川があふれたなんてことあったのかなあ…？
う～ん、どっちだろう？

答えは「信州地域史料アーカイブ」を見るとわかるよ。

「信州地域史料アーカイブ」って？

図書館、博物館や文書館などに保存されている貴重な地域史料をインターネット公開したサイトだよ。

そうなんだ、じゃあ、遠くの図書館まで行かなくても昔の史料が見られるんだね。問題の答を探してみようかな。

じゃあこんな問題はどう？ 県歌の「信濃の国」はどうして作られたのか知ってる？

- 1 番 長野県を南と北に分県しようという運動があり、この「南北問題」を融和させるために作られた
- 2 番 昔、信濃国といわれたことを忘れないために作られた

「信州地域史料アーカイブ」でそういうことも分かるんだね

もうひとつ。江戸末期になると善光寺参りのような旅をする人が増えて、旅路のガイドブックが盛んに作られたんだ。そこで問題、善光寺参りの旅ガイドは次のうちどれ？

- 1 番 善光寺案内
- 2 番 善光寺道名所図会

へえ、そんな昔にも旅行ガイドがあったんだね。それにしても似たような名前だねえ、これは「信州地域史料アーカイブ」を見ないとわからないなあ。

ぜひ見てみて。長野県の貴重な資料を見られるよ。おまけに解説や現代訳もついているからわかりやすいんだ。

「信州地域史料アーカイブ」

<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/2000515100>

災害、教育、善光寺、真田氏関係 約 200 点の史料の高精細画像、現代訳、翻刻・訓読、解説を見ることができる。キーワード、エリア、年代などからの検索も可能。また専門家の解説による現地ロケ映像や古地図など多くのコンテンツがある。

2019 年 3 月、調べ方案内（パスファインダー）や、長野県内デジタルアーカイブ一覧など、調べる機能を充実させてリニューアル公開した。

NPO 長野県図書館等協働機構（長野県図書館協会）制作

寄稿

あさくさ雷門ホールが繋ぐ映画と人々

もぎりのやぎちゃん（やぎかなこ）

『青天の霹靂』という映画をご存知だろうか。大泉洋演じるうだつが上がらない主人公が雷に打たれてタイムスリップ、若き日の両親と出会うというストーリーだ。この映画は私が今お手伝いをしていいる上田映劇がロケ地として使われた。上田映劇は映画館として活動しながら、今も映画『青天の霹靂』の名残を留めている場所である。外観は「あさくさ雷門ホール」と掲げられ、ロビーをはじめとする内装もほぼ映画そのまま。上田映劇は大正6年からあり、その歴史と相まってロビーのレトロ感は

昔からあるものだとは勘違いされることがままある。「これは映画のセットなんですよ」と真実を告げるとすこしがっかりしたような表情をされるので、とても申し訳ない気持ちになる。しかし上田映劇に残る格天井と呼ばれる天井は100年ものなので、本物のレトロと創作のレトロが入り混じっている不思議な空間だ。話を『青天の霹靂』に戻す前に、少しだけ私の話をさせてほしい。私ももぎりのやぎちゃん。上田映劇でもぎり（チケットをもぎる人）として手伝いをしている者だ。出

身は茨城県で紆余曲折の末、上田の街に転がり込んだ。『青天の霹靂』も公開当時に茨城で観た記憶がある。ただ内容は覚えていないものの、どんな映像だったかはいまいち覚えておらず、上田映劇がロケ地とはピンと来ていなかった。「この階段、大泉洋さんと柴咲コウさんが降りてきてましたよね」と見学に来たお客様に言われても「そう、ですね？」と心の中で首を傾げていた。そんなわけで、あやふやなままお客様に上田映劇や『青天の霹靂』について説明するのもいかなものかと思いい、映画を見返すことにした。いざ見返してみると想像以上に上田映劇には今も『青天の霹靂』のセットが残っていないことに気付く。ロビーだけではなく、映画の中で支配人室や楽屋として使われた部屋もほぼその

ままだった。そして「確かにこの階段、大泉さんと柴咲さん降りてきてたな」とただの階段だと思っていたものが急に特別な階段に見えてきた。自分の日常だと思っていた風景は、映画という物語と繋がっていたのだ。

ところで私は『青天の霹靂』を観る直前、SNSに「今から『青天の霹靂』観ます」となんとなく投稿してみた。すると上田で知り合った方々から「私、エキストラで出てくるから探してみて!」「僕も!」「私も!」というコメントがたくさん寄せられた。もはや『ウォーリーをさがせ!』状態である。誰一人として知り合いを見つけないことはできなかったが、エキストラを眺めていると「上田映劇」の四文字を見つけた。当たり前だけどすごく嬉しい。そして

再びSNSをチェックすると『青天の霹靂』にエキストラで参加した方々が撮影時の思い出話に花を咲かせていた。その様子は画面越しではあるものどこか誇らしげだった。

『青天の霹靂』という映画が上田映劇にとつて特別な一本であることは間違いない。しかし同時に上田の人たちにとつても特別な一本なのだとおもった。今も上田映劇の外観に掲げられた「あさくさ雷門ホール」はそんな上田の人たちと映画を結ぶシンボルなのではと改めて『青天の霹靂』を観て思った。



着物を着て、上田映劇に来ると映画の世界に迷い込んだ気分になれます

プロフィール

もぎりのやぎちゃん(やぎかなこ)

茨城県出身。上田映劇のもぎり。好きな映画は『紅の豚』。今年は「書くこと」に挑戦中!



あとがき

「信濃を旅した文人たち」では、「環」のコンセプトのひとつ「埋もれた文化や活動を発掘する」ため、一人ひとりの物語と向き合っています。

32号では、作家・一ノ瀬綾さんにインタビューしました。一ノ瀬さんは武石村（現・上田市）出身で、近隣の図書館には作品が並びますが、意外と知らない人が多いようです。今回、記事を読んで興味を持った方から「一番のおすすめは？」と聞かれ、迷わず『黄の花』をあげました。『黄の花』は戦時下の農村の貴重な記録として、また、青春文学としても今なお色あせない作品です。

現在、ケアハウスで暮らし、執筆活動から離れている一ノ瀬さんにとっても、この記事は同人誌仲間などとの久しぶりの交流につながったとのこと。「勉強会の研究テーマにしたいという人もいるのよ」と、電話口でうれしそうに話され、実際に茨城の文学グループで取り上げてくれることになりました。

33号の「近世おんな旅」は、江戸時代に九州から日光まで、800里もの道程を踏破した商家のお内儀さんの旅日記が基になっています。さまざまな文化や風俗に遭遇しながら、自らの足で144日間の大旅行を成し遂げた女性たち。天晴れなその姿に、今を生きる女性たちから驚嘆の声が寄せられています。

このような反響はなによりの励みとなり、次へのステップへとつながります。毎回、試行錯誤しながら取り組んでいますが、忌憚のないご意見をお待ちしております。（はな）



^{KAN}
環 千曲川地域の人と文化を紡ぐ 第 34 号 胡蝶

2019 年 4 月発行

NPO 法人上田図書館倶楽部

<http://ueda.zuku.jp/>

電話 /FAX 0268-25-3115 info@zuku.jp

表紙及び文中の写真・絵は無断使用を禁じます。

環スタッフ：

伊藤文字 海野 郁 西入幸代 宮下明彦

望月聡子 矢幡正夫 吉澤茉帆

NPO 法人上田図書館倶楽部は、上田情報ライブラリーを拠点に活動しています。上田情報ライブラリーは上田市立図書館のひとつで、市民との協働を理念に掲げています。これに基づき、当倶楽部は図書館と共催で学習活動や情報サービス、文化活動などを行っています。